

風土記の丘の花だより²²⁶

今、そしてこれから見られる植物(2024年3月9日)

先日、修復古墳を歩いていると「♪♪ つくしの子が 恥ずかしげに 顔を出します。もうすぐ春ですねえ」そのものでした。 なつかしい昭和歌謡の情景ですね。



アミガサユリが咲き始めました。花びらには網目模様が入っています。写真は小早川家の庭で撮ったものですが、万葉植物園でも咲いています。この前、芽が出てきたと思ったら、もう開花しました。ずっと冬を耐えていたのでしょね。この花はバイモユリとも呼ばれます。漢字では「貝母」と書きます。球根の形が二枚貝に似ているからだそうです。元々は中国の花で、江戸時代に持ち込まれたといわれています。下向きの控えめな花は、特に茶人に好まれ茶花としても用いられてきました。



つくしの子が顔を出している修復古墳の下に黄色いサンシュユがきれいに咲いています。一つひとつの花は小さいですが、枝いっぱい咲くので、木全体が黄色く見えます。「サンシュ」とか「サンシュウ」とか色々よばれますが、正しくは「サンシュユ」です。漢字で書けと言われても難しく私は書けません。でもパソコンはえらいですねえ、「山茱萸」と即座に変換してくれました。この木も上のアミガサユリと同じ頃に中国から渡ってきたそうです。



ユキヤナギの白い花があちらこちらで咲いています。写真は谷村家住宅の庭です。ヤナギといっても柳の仲間ではなく、5枚の花びらを持つバラ科の植物です。枝がしだれているので枝垂れ柳を連想し、ヤナギと付けたのでしょう。枝にたくさんの花が咲くと、文字通り雪が積もって枝垂れているように見えますね。植物の名前には「なんでこんな名前つけたの?」と言いたくなるようなものもありますが、このユキヤナギという名前は、特徴をよく捉えて、かつ響きに風情もあり、なかなか秀逸だとは思いませんか?



春のお彼岸が近づいてくると、この花の香りが漂い始めます。このあたりでは「びしゃこ」と呼ばれるヒサカキです。仏事には欠かせない木で、私たちの生活と強い関わりのある植物と言えます。この木には雌雄があります。写真は雄株に咲く雄花で、小さな花の中を覗くとたくさんのおしべがあるのが分かります。また雌株も探してみてください、花の作りが違います。 松下